
扉と世界と俺らの運命

とっくり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

扉と世界と俺らの運命

【Nコード】

N2512Z

【作者名】

とつくり

【あらすじ】

今。彼は、異世界にいます……

そうです、そうです異世界です。間違いありません。何故彼がそこにいたのか？

神様の不手際。ということにしておきましょう。

彼は、何も知りませんし何もできません。

彼は、今まで誰かに依存し生きてきました。

人の命は平等だ。命を奪うなんてありえない。

生き物だって同じだ。魔物だって生きている。

でも自分のこととなると話は、別。

彼は、自分の考えが甘いことをこの世界で知る。

いわゆる、自己中心的な彼が異世界でどうなっていくのか……

そんなお話です。

（内容は、突発的に書きはじめたのでいろいろと拙いですが温かい目で見てください。）

第一話 扉と草原と俺

お約束があふれているこの世界でも、扉をあけたただけであんなことになるなんて誰も想像できないだろうだが、世の中には、想像の斜め上に行くものがあつたらしい……というより存在するのだ。

今日も、学校か……

正直いやだった。毎日勉強？そんなもの鼻で笑ってくれる。

「ああ……自分の好きなことだけしていい世界に行きてえ。」

愚痴を言っても意味がないので、着替えて鞆に適当に荷物を入れ朝食を食べようと、

下に降りるためドアに手をかけ扉を開く

俺は、某有名漫画のポピュラーな道具をいつの間にか手に入れているらしい。

俺の頬にひんやりとした風が流れる。

目の前に広がるは、部屋の廊下などでは無く草原だった。

360度見渡しても人影も町並みもありはしない。

そこにあるのは、草だけである。

『ごめんなさい。』

頭に声が響く。

「誰だ！」

あたりを見渡すが先ほどと変わらない。

『探してもだめですよ。私は、あなたの頭に直接話しかけているだけだから。』

聞いていると眠ってしまいそうなほど心地のいい声。

「ここは、何処だ？なんで俺は、ここに？あんたは、誰？」

『ここは、ラスグラント草原。あなたは、私たちの不手際でこの世界へ。私は、神のひとり。』

文句ひとつ言うことなく、淡々と話してくれた。

……ま、まてラスグラント？聞いたことも見たこともない。ここはどうやら日本では無いようだ。

自分の蟻にも劣るような脳をフル回転させ、状況を整理する。

まず俺は、この神様たちの不手際で日本では無いラスグラント草原なる場所に来たようだ。

とりあえず、帰ろうと思う。神様なら何とかしてくれるだろうと思

う。

『あゝ帰ることは、無理ですね。ごめんなさい。その代わり少しだけこの世界について説明します。』

か、かえれないだと！ 齢15にして天涯孤独の身になってしまった。状況は、結構ヘビーだ。

とりあえず状況整理だ、この神の話によるとここは僕がいた世界と違うこと。

魔物が存在し他にも、ゲームか二次元でしか見たことのない獣人。魚人。などがあること。

僕のように異世界から来た人間は、百年に一人ぐらいで、異世人と呼ばれること。

魔術なるものも存在しているらしい。

（まだ、信じないがな！）

『最後に、身分証明書です。』

「まだあるか……身分証明書って？」

『見てもらったほうが早いです。』

手元に手帳サイズの黄金色こがねに輝くカードのようなものが現れる。

『それは、知識板と呼ばれそ俗称は、ナレッジと呼ばれます。』

「まんまじゃないすか……もう少しカッコいい名前でもいいだろうに。」

『とりあえず、ナレッジは額に当てると文字が浮き出ますので。俺のツツコミには、何も触れずに説明をしてくれる神様。』

『それでは、私はここで。他のことは厳しいようですが、自分ですうにかしてさい。』

そう告げると頭の中にあつた、暖かいような感覚は、なくなった。とりあえず、ナレッジを額に当てる。

うお、なんか浮き出た！

……日本語だ。この世界の文字は、日本語のようだ！これなら読める。俺は、ナレッジの文字を読んでみた。

『名前	篠崎 裕十
種族	人族

称号	神の黒歴史
----	-------

職業	なし（フリーター）
----	-----------

『

……よくわからんな。

とりあえず一、二言。地味……

RPGみたいに、力、かしこさ、とかあると思ったのに。

360度見渡しても草原。

歩きながら今後どうするか考えることにする。

.....
腹減つたなあ。

第一話 扉と草原と俺（後書き）

はじめまして？とつくりです。

別の小説書いていたのですが、挫折。

今度こそ！という気持ちで頑張ります。ゆっくり更新します。

初めての作品のようなもんなのでアドバイスなどよろしくお願いします。

第二話 夢と希望と未来

無責任にもほどがあるぜ……

太陽の日差しが 燦々^{さんさん}とふりそそぐなか、一人の少年は草原を歩く。彼以外人の気は無く、静かに、ただ力強い風が吹き続けている。

「……………飽きた。腹は減るし、何もないし、何より疲れた。こんなことやってられっかよ。」

少年は、倒れるように草原へ寝そべる。少年の目に映るのものに、何処までも続く青空と、もう会えないと思われる家族と友の顔があった。

「……………なんだ？」

少年の耳に、今にも途切れてしまいそうな力の無い音が届く。

途切れて、少しするとまた届く。

かすかに聞こえる音に対し寝そべっている少年は

「うるせええぞー！誰だよ、俺の睡眠時間を邪魔する奴は！ー向こうか、今に見てる。」

激怒し、そして走り出す。

音とは逆の方向へ。戦争まったただ中の戦場へ。少年の運命の分かれ道へと。

「戦況報告に参りました!!」

キレのいい敬礼のあと、一連の作業で片膝をつく男。

「後にしてくれ、私は今忙しい。」

「で、ですが……」

「後にしてくれと今、私は言ったが？」

「っ！す、すみません！失礼します……」

声とともに部屋の扉が閉まる音。耳をすませば聞こえる衛士たちの足音。

「ずいぶんとイライラしてんだな。」

不意に後ろから声をかけられる。

なんでいるんだ。

「イライラしすぎると、大臣たちみたいに禿げるぞ。」

「五月蠅い。黙れ。それにいつからそこに居る？」

「おやおや、戦場から抜けるところも勘が鈍るのか。いやだねえ。」

「……嫌味を言いに来たわけでは、無いのだろう？」

「ふふ、失礼。国王がお呼びだよ。」

「それを早く言え！くそ、だからお前は気に食わんのだ。」

上着を手にとる。今すぐにでも国王のところにいかなければならないのは分かっていたが、どちらにしる目の前に居るコイツが邪魔だった。

「私は、今すぐ行かねばならん。さっさと出て行け。……面倒事になる前にだ。」

「……どういみですか、俺にわかるように説明して下さい。」

そう言って男はかすかに目を細める。

「黙れ。早くしろ。」

「……………」

「なにしている。」

「黙れって言ったから。」

ブチッ……もう殺^やっちゃって良いんだろうか？

「私としては、無駄な殺生はさけたいんだがね」

「おお、怖い怖いそれでは、お氣をつけて。」

わたしに一礼し出ていく男。つくづく嫌なやつだ。

やっぱり戦場の方が私に合っているんだがな……

嗚呼、なんて退屈なんだ。

「いえ、主の前で弁解など無意味なことは熟知しております。」
「ふあゝ、まあいい。わしも早く眠りたい。呼ばれた理由はわかつとるか？」

「いえ。諸事情で忙しく。申し訳ありません。」

「堅苦しいのは、やめじゃフィニアス。戦況がよくないのは、知つておろう？」

そこで、我々は禁忌の召喚術に手を出すことにしたのじゃ。」

「っ！そ、それは……」

「よい、言わずとも顔にでとるわ。」

「術は、成功したのでありますか？」

「ふあふあ、もちろんじゃそこでお前にじゃフィニアス、そやつらのサポートをしてやってくれぬか？」

「もちろんでございます！！」

「そう言ってくれてありがたい。ほかにも、3人ほど城から選んでよいぞ。話は以上じゃ。」

「そ、それで異世人は、いまどちらに？」

「詳しい話は明日じゃ。」

「はっ」

これで、退屈な日々とおさらばだ。貴族だなんて俺には、合わない。

明日が楽しみだなあ。

なんで此処に居るんだ僕たち！！

確か、友達の葬式に参加していたはずだ。
そう、あの時

「突然だが、今朝このクラスの篠崎が亡くなった。自宅で意識を無くし病院で死亡が確認されたそうだ……」

「……」

「今週の土曜日、クラスの何人かが葬式にでる。」

「先生は、もちろん行くが無理にとは言わない来てくれる人はいるか？」

誰も手を挙げないだろうなあ……

アイツ、イイ奴なんだけどわがままところが目立って良いイメージないもんなあ……

「はい。」

重い空気がふわっと軽くなったかのように凜とした透き通った声が響く。

「えっ……いいのか大塚？えっとでは、他に……」

「はい。」

ここは、やっぱり僕しかないわ。

すこしぽつちやりした俺でもやさしくしてくれたもんな……

「えっと、菊池もいいんだな？」

「……」

学校のチャイムが鳴る。

「それじゃあ気を取り直して、今日の授業をはじめます。」

「起立！気をつけ！礼！」

「……お願いします」

線香の匂いだ……

全体的にやっぱり暗く、篠崎の家族だろうか泣きながらも挨拶をしてくれた。

先生の後についていき席に着く。

「お前たちは、此处で静かにしてるよ？先生は挨拶にいつてくるから。もう一度。」

日高先生は、座つとくだけでもいいって言ったけど……
篠崎には、わるいが今しあわせです。

大塚さんが俺の袖を掴んで上目使いで見てきちゃったよ。

つぶらな瞳にすこし茶色ぱい三つ編みの髪の毛。もう、妖精さんといつていいんじゃないだろうか？

さらにメガネだよ。此处重要。メガネっ娘だよ、みなさん！！

「菊池、すこし落ちつけ。」

顔をあげると先生がいた。

ハイ。先生、すみませんでした。

和尚さんみたいな人が入ってきて。
何かをはなしてる。

篠崎家の人たちの泣く声が少しだけ大きくなったきがした。

本当に死んだんだと、改めて思った。

少し時間がたち、読経と涙の音しか聞こえない。そんな時だった。

「菊池君……なんかきぶんが……悪くなっ……」

！？ど、どうしろと。た、たいへん先生！先生！

「菊池、だから落ちつけて。」

そう言い僕の肩をポンとたたく。それどころじゃないよ先生！

「？大塚……ど、どうした。だ、だいじょう……ぶか……」

ええ！？先生まで。周りの人に気づかれたらオシマイだよ！

『あなたが……勇者なのね。見つけたわ。』

！？もうわけわかんない、今の声何？

自然な動作で頭に手をやる……

その時視界が歪んで、自分が融けているような気分になった。大塚
さんも。先生も一緒に。

だから、此処に居るのか。

僕の左右に気を失ってる大塚さんと先生。

周りに注意すると10人いやそれ以上の人たちが僕たちを沈黙した目で見ってくる。

『3にん……？』

「え？」

『いえ、何も。あなたが勇者様一行ですね？』

「すみません、何を言っているのか……」

『言葉が通じてないのですか……』

『これは、大変ですよ国王様……』

状況が分からないまま。僕たちは、自分の意識を手放した。
夢でありますようにと願って。

第二話 夢と希望と未来（後書き）

なんか、ごちゃごちゃしました。

すみませぬ。とっくり頑張るぞう！！

キャラの名前は、とくに意味はないので……
気軽に温かい目でみてください。

フィニアスなんか友達からのアイデアなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2512z/>

扉と世界と俺らの運命

2011年12月17日19時54分発行